舞踏の系譜について 1960年～現在

国吉　和子

1960年代初め，日本の現代舞踊から派生した新しい舞踊表現は一般に「舞踏」と総称され，発生当時から現在までの約25年間，変化に富んだ作品が記録されている。舞踏の深化と展開の様子は，日本の舞踊史の中のひとつの問題提起として受けとめることができる。そこで舞踏史の全貌を捉えるため，'59年から'82年までの舞踏作品年表と，舞踏家の系譜図とを作成し，この2点を主な資料として，土方巽，麿赤児，笠井叡という主要な舞踏家の特徴を明らかにすることを目的とした。

Ⅰ．土方巽と暗黒舞踏派 ― 戦後，秋田から上京した土方巽は，江口隆哉，津田信敏等の門下を通過し，安藤三子の下でモダンダンサーとして出発した。'59年自作品「禁色」を発表以後独立し，'63年「あんま」で初めて暗黒舞踏派と自称し，独自の舞踊感を展開してゆくことになった。肉体を巡る具体的な意識を暗黒舞踏という言葉で総括し，肉体個有の表現を追究するために既成の方法，考え方に一切囚われることがなかった。'59年～'76年に発表した作品傾向を，1期（'59～'68「肉体の叛乱」），2期（'72「四季のための二十七晩」～'76「鯨線上の奥方」）と大きく分けてみた。

1期：①男達による踊り②肉体のフォルムを明確で硬質にする動き（裸体に近い衣装で直立硬直した直線的動き）③肉体の物質性を強調（梱包による個性の消去，フェティシズム）④切実な体験で獲得したものに存在の基盤をおく⑤エロチシズム（性的倒錯，女装，両性具有）⑥ジュネ，ロートレアモン等の文学作品をモチーフとする⑦作品としての完成をめざさない（突発的，暴力的）。以上の内，③④⑦にはネオ・ダダイズムの影響が伺える。2期に入ると土方は振付け，演出へと力をそそぐことになった。

2期：①芦川羊子らの女達中心の踊り②厳密な作品化（簡潔な舞台構成，場面の断片化）③記憶を貯蔵するものとして肉体を意識する（肉体の下層部の重要性，風土性の強調，'72，'73作品を東北歌舞伎と銘打つ）④振付けの完成（迂回する手ボケの演技，ガニ股の踊り→物腰，重心を低くして小さく踊る，顔面表情，動植物への変身等）

'60年代土方の周辺で未分化のまま協演していた様々な舞踏家達は，'70年に入り各々の舞踏団を組織し，独自の活動を始めた。舞踏人口増加で，公演数も'70年代後半に急増している。

Ⅱ．麿赤児と大駱駝艦 ― 劇団状況劇場の役者だった麿赤児は，土方にも師事，劇団を退団後，'72年大駱駝艦を結成した。一連の荒唐無稽な作品群は，天賦典式と呼ばれるが，大規模な舞台作りを特徴とした1期と'79年以降，豊玉伽蓋（稽古場）を根拠地として活動した2期とに分けることができる。

1期：①大規模なスペクタクルを仕掛ける（野外ペイジェント，舞台装置の工夫）②男達の群舞が中心（滑稽味を強調した男色行為の暗示，陽気なエロチシズム）③筋肉のぶつかり合いによる即物的暴力性）④大仰な儀式性と，肉体の混沌とを対比させて演劇性を強調⑤アングラ演劇からの転向者が多く参加⑥見せ物としての肉体を徹底させる（金紛，キャバレーダンスの導入等）

2期：①肉体の風土性を重視，地方の根拠地への分派（北方舞踏派，背火，白虎社等）②小空間に適した舞台構成（絵巻形式，場面の増加）③女子部の設置，以上の特徴が顕著になる。

Ⅲ．笠井叡と天使館 ― '64年～'65年の全日本芸術舞踊協会主催の創作舞踊公演に，高井富子と共に作品を発表していた笠井叡が，土方作品に初めて参加したのは'65年「バラ色ダンス」だった。その後'66年初リサイタルを開き，'71年天使館設立までの間，独舞公演を続ける。'67年「O嬢の物語」など初期作品に著しいエロチシズム，特に両性具有というイメージは，彼の中で観念として捉えられている点，すでに精神と肉体の間に引裂かれる状態として踊りを意識していたと考えられる。笠井の舞踏は特に「神聖舞踏」と呼び，次のような特徴をもつ。①独舞形式を基本とする②即興性が強い（流動的な動きの中で霊的モノローグを行う。正確なバランスをとる）③カタルシス舞踊（認知，受肉，カタルシスへと至る経過）④豊かな音楽性⑤個的秘儀としての舞踏（個の絶対性を生きる形式）⑥肉体に位階制を想定する（物質にすぎない肉体を意志的に，より上部の位階へ上昇させる力）。さらに'70年代後半の笠井の舞踏からは，神秘主義への傾倒を指摘することができる。R・シュタイナーの研究者でもある彼の舞踏の明確な動きの形象性を，シュタイナーの提唱したオイリュトミーからの影響と考えることも可能である。

最後に，ここに概観した三者以外にも大野一雄ら独自の作品世界をもつ秀れた舞踏家が点在しており，単一の視点から全てを理解することは難しい。混沌とした'60年代に萌芽した命脈が，'70年代各々の担い手により独自の展開をとげたのであり，この広がりを包括して初めて肉体というものの多様性を語ることができるのではないかと思う。

（作品年表および系譜図は紙面の都合で省略）